5　読みきかせについて考える

1　研究の動機と経過

本校で読みきかせが本格的に行われるようになったのは、10年ほど前で、高等部の国語の時間であった。しかし、研究として体制が整ったのは、４年前からである。

知恵遅れの子どもたちの中には、ことばがなく、文字も読めない子、また、感情表現が非常に乏しい子が大勢いる。しかし、子どもたちは、素直で優しい心をもっている。その心をより豊かにと願い、絵本の読みきかせを行ってきた。

絵本の絵は、きれいで鮮明であり、とても印象深いものが多い。子どもたちのみならず私たち大人も引きつけられる。また、精選された豊かなことばは、読むものの心をゆさぶる。

子どもたちと、絵本を見合ったり、読みきかせをすることで、絵本の世界を共有し、「絵本は楽しいものなんだ」と感じて欲しいと考えてきた。

そして、子どもたちに、たくさんの絵本を出会わせていく中で、ことばや知恵、思考力、想像力、人間関係が豊かになり、絵本の広がりが、その子の生活の広がりとつながっていって欲しいと願う。

研究が始まった当初は、まず、読み手である教師が、読むことに慣れること、また、本の選び方や読みきかせ方、手だてなどについて話された。一方で、各学部における本の充実や、それを並べる場所についても考慮してきた。

昨年度より、読みきかせにおいての“気づき”について視点を当て研究を進めてきた。そこで、より気づかせるために、いろいろな手だてを試みたり、子どもたちの気づきに、読み手である、私たちの大人が気づいていく大切さを、確認し合ってきた。

本年度は、その気づきについて、より客観的に見てみようということで、ＶＴＲを利用し、子どもたちの気づきを細かく見てきたのである。

2　本年度の研究

(1)　読みきかせにおいての気づきを大切に

昨年度につづいて、読みきかせにおいての気づきを大切に受けとめ、一人でも多くの子どもに豊かな心情を育てるように研究を始めた。

まず、５月上旬に読みきかせにおいての気づきとはどんなことかを確認し合い、今年度の研究の実践・計画をたてた。

＜読みきかせにおいての気づき＞

絵本を読みきかせている時に、感動のあまり、つぶやきや声が出る。また、読み終った後に感想を話したり書いたりする。つまり感じたことを表現することが気づきである。

4　おわりに

グループでの5年間の活動を思いおこし、改めて実感されること4点について述べまとめとしたい。

(1)　毎年研究協議会を持ち参加者と意見交換をしてわかったことの一つは、学校あるいは部としての組織的な取り組みが仲々容易でないという実態であった。性教育の大切さ、必要性は認めながらも、まわりの大人の態度、受けとめ方考え方に違いがあり　さらに教師自身にもとまどいがあってとかく敬遠されがちとなる。結局、意欲と関心のある個人的な働きかけにとどまって、組織的な対応とならない所が多いようであった。その意味で、今日の性教育推進の風潮に先がけて、このグループができた事そして継続的な活動が行えたことは改めてその意義の大きいことを実感する。しかも、子ども達に緊急な課題、問題があって対処しようとして生まれたことでなく、落着いて受けとめて出発できた事もよかったように思う。

(2)　グループでの会を重ねた討議、語りあいあるいはビデオを見ての話し合いは、この指導の持つ何か知りごみしたくなる面や気恥ずかしさを払しょくさせる力を与え、子どもや授業に対して何か自信らしきものをもたらすところがあったといえる。たとえば「ちんちん」といっていたものが、ごくあたり前に「ペニス」といえるようになったことなどは以前とは違うといえる。そして教師の真剣な姿勢というものは、子ども達にも十分通じるものであり、指導にあたっての心配等を杞憂に終わらすものであるということもいえる。

(3)　性指導を幅広く受けとめ、生き方の問題として見ていくことは学級指導や各教科などあらゆる活動のなかで、ちょっと性を意識すること、性の視点で見てみることで気楽に取り組めることを感じた。要は教師の意識の中にそうしたものが備わるかどうかである。そして授業というかたちでなされる指導はその一面であって、時、場所を問わず、個に応じてなされる日常生活指導もおろそかにしてはいけない。

(4)　昨年来―子どもの気づきを大切にして―というサブテーマを設けて研究してきた。このグループも学習の中で、あるいは日常生活の中で子どもの気づきに注意してきたが、「気づき」ということばを「おもい」ということばでうけとめることが多かった。目の前にいる子ども達が、今何を考え、どうおもっているのかその性感情を知ろう、わかろうという姿勢できた。性感情や行動が見える子はいいが、そうでない子の方が多いといえる。我々が困ったり悩んだりしたと同様に、子ども達にもきっと何かあるはずだ、わかってやりたいという気持ちで見てきた。そうした姿勢を指導の出発として大切にしていきたいものである。

（浦　田　東　作）

3　実践例

(1)　小学部低学年

①　児童の実態と実践の場

このクラスは１年生３名、２年生４名の計７名で構成されており、自閉傾向２名、ダウン症３名、その他２名という障害の状況である。どの子も音声言語を有し、人とのかかわりが持てる。絵本を楽しめる子も数名いる。しかし、低学年ということもあり、集中力、持続性にかけ、学習に向かう態勢のできていない子もいる。

読みきかせは「終りの会」で行い、毎日３名の担任が交替で２～３冊の絵本を読んできた。

子どもたちは、下校の準備をすると“おかえり号”（箱車）に乗りこみ手遊びをしながら下校準備の騒々しさから気持ちを静めて読みきかせを待つ。　毎日決まった時間に、決まった場所で、決まった活動をすることで、子どもたちは見通しを持ち、安定して活動に参加することができた。大好きな絵本を「読んで」と持ってくる子どももいて待ちどおしい時間のひとつになっている。

しかし、かばんをかついで帰り支度をしての読みきかせは、身体的な束縛があり十分絵本の世界に入りこめないのではないかといった反省もある。

②　初めての集団での読みきかせ

学校生活の何もかもが初めてで落ち着かず、情緒的にも不安定な１年生。その子どもたちに絵本の楽しさを知らせていくために、以下の４つの点に留意して読みきかせを行った。

◆複式学級の特徴を生かし、最初は２年生の好きな絵本を読みきかせることで２年生の楽しむ姿に１年生を巻き込み、共通の楽しみが持てるようにする。

◆絵本のイメージが、読み手（教師）と聞き手（子ども）とのかかわりの中で豊かにふくらむように内容を発展させ遊ぶことで、読み手（教師）を通して絵本の楽しさを伝える。

◆絵本の世界に共感し、少しでも心がゆさぶられるように子どもたちの生活体験や興味に基づいた絵本の選択をする。

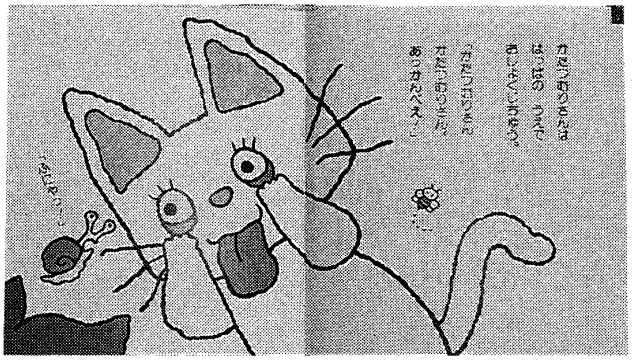
◆絵本の内容に深く入りこみ場面を予測する楽しみが感じられるようにくり返し読む。

③　実践例

『あかんべ　ノンタン』　　（おおともやすおみ・さちこ　作　偕成社）

ノンタンのシリーズは子どもの生活体験が楽しく表現されていて、子どもたちに出会わせたい絵本の一つである。中でも「あかんべ　ノンタン」は、子どもたちが大好きで、多くの気づきが見られた。

絵本を読むにあたり、身体を動かすことで言葉のリズムを感じさせたい。また、「あかんべ」を子どもといっしょに遊ぶことで絵本の楽しさを知らせたい。



＜子どもたちの気づき＞

ノンタンが「たったか　たったか」歩くところを読み手が足を交互に動かし読むと、子どもたちもいっしょになり足を動かす。「あかんべ」になるとニコニコ笑顔になり、大きな声を出し「あっかんべー」をするＳ男。手を頬のところに当て「あかんべ」をしているつもりになっているＲ男。ほとんどの子どもたちが「あかんべ」をたのしんでいる。しかし、１年生のＹ男は促されてようやく「あかんべ」をする。読み手の顔と絵本をよく見ている。読み終えて、言葉がようやく出るようになったＲ男が「ペー」と言いながら「あかんべ」のまねをして絵本を貸してほしいことを言ったり、絵本に視線を向けることの少ない１年生のＫ男が書架から一人で絵本を取り出しページをめくりながら「あかんべ」をしている姿が見られた。絵本の内容を動作化し直接体験することで、そのイメージをふくらますことができる。「あかんべ」と、読み手と聞き手が目と目をあわせコミュニケーションを楽しむことで、よく深く絵本の世界に共感し気づきも多く見られた。また、単純で鮮明な絵や、繰り返しのあるリズミカルなことばは子どもたちに分かりやすかったようである。

『はけたよ　はけたよ』　　（神沢利子　文．西巻茅子　絵　偕成社）

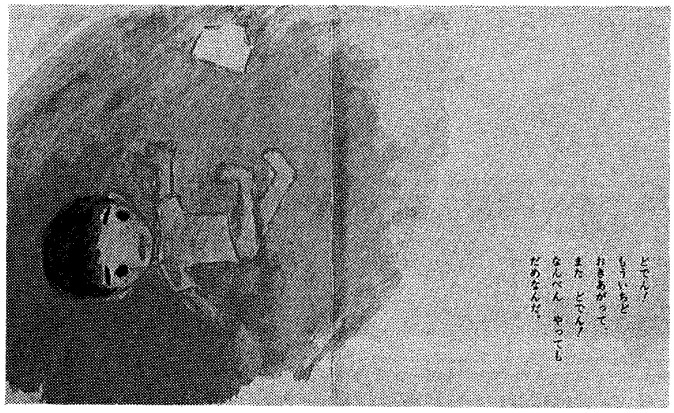
こぐまちゃんの絵本シリーズや、ノンタンの絵本シリーズ、ごあいさつあそびなどの絵本を通して友達や読み手と絵本の楽しさを共有することができるようになった子どもたちである。

そのような子どもたちに、イメージをより豊かにふくらますことのできる絵本に出会わせたいと絵本の選択に留意していった。

その中の「はけたよ　はけたよ」の気づきを通して子どもたちそれぞれの絵本の楽しみがみられた。

この絵本は立ってパンツのはけない「たっ君」が主人公で、子どもたちの大好きなお母さんや、なじみの深い動物たちがでている。子どもたちの中には立ってズボンをはけない

子もいて「たっ君」の気持ちに共感できると思い選んだ。



読むにあたって、「たっ君」の動作とそれに合わせた言葉を楽しみながら読み進めたい

＜子どもたちの気づき＞

S男は、「どでん！」という言葉が好きでその場面を期待した表情で待ち、読み手といっしょになり声を出す。また、おしりを洗う場面では、けらけら笑いながら見ることが多く見られた。R子とT子は絵本の中のお母さんを指さしその手の位置をまねたり、「たっ君」の動作をまねたりする。絵をよく読み取って楽しんでいる。Y男もT子やR子の様子と絵を見比べながらいっしょに楽しんでいる。R男とK男は絵本をジーッと見ている。時々視線はずれるがゆったりとした表情である。しかし、Y男は始終落ち着きなく体を動かし、絵本をあまり見ることができなかった。Y男にとっては興味のある絵本ではなかったようである。

読みきかせの最後に、R子の気づきを受け止め子どもたちの一番喜んだ「たっ君」がお母さんにおしりを洗ってもらっている場面を動作模倣して遊んだ。次々と前に出てきて「たっ君」と同じよつばい姿勢になり、読み手にジャブジャブとおしりを洗ってもらう。大喜びの子どもたち、その時はY男も前に出てきてよつばい姿勢になる。

一人の子の気づきをみんなで楽しむことで、他の子どもの気づきがひろがり絵本を新たな感動を持って見ることができた。集団の読みきかせのよさであろう。何度もくり返し読むことで、読み手といっしょに声を出したり、絵をより細かく見取ることができるようになり気づきも多く見られるようになった。また、「はけたよ　はけたよ」の言葉は子どものことばとして広がり、ズックを履いて「はけたよ　はけたよ」とつぶやく子がいたり、着替えのとき絵本をそばにおいて着替えている姿が見られた。絵本から受けた感動が子どもの心をゆさぶり生活の中にもひろがってきている。

今、７名の子どもたちは休み時間になるとさりげなく絵本を手に取り読んでいる姿が見られる。まさに絵本が子どもの遊びとして育っているのである。

今後も、子どもの心をゆさぶる絵本に出会わせていくと同時に、子どもの気づきを受け止め、子どもの世界を広げていけるような読みきかせをしていきたい。

(2) 小学部高学年

このクラスは、５、６年生８名で構成されており、自閉傾向５名、ダウン症２名、その他１名というクラスである。ことばのない子３名、単語程度のことばのある子３名、会話ができる子が２名いる。クラスとしては、自閉傾向の児童が多いため、ことばでのコミュニケーションはないが、教師との関わりが広がりつつある。

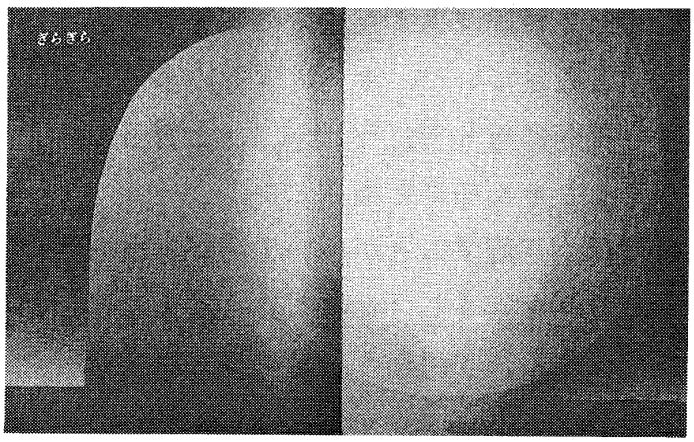
読みきかせは、下校前の10分程度を、椅子に座って読み手を中心として半円の形で、週に３～４回行っている。

まず、新学期当初は読みきかせの時間がなかなかとれず、子どもたちも落ち着きがなく絵本に集中しなかったが、２学期中頃からようやく読み手も落ち着いて読めるようになった。子どもたちの様子を見ていると、自閉傾向にある児童は、ストーリーを追って見ることは難しく持続性に乏しい。しかし、絵の部分を見たり、読み手の話し方に反応しているようだ。その中で、じっと見たり、つぶやいたりできるのはダウン症の２名で、他は、ほとんど反応がなかったり、見ていない様に思えた。

週に３～４回の読みきかせをＶＴＲで記録し、分析してみると、ゆったりとした表情の子どもや、時々、絵本に視線をおくっている子どもたちのいることがよく分った。ここでその例をあげてみたいと思う。

『もこ　もこ　もこ』　　（谷川俊太郎・文　元永定正・絵　　文研出版）

なかなか絵本を見てくれない子どもたちに対して、前年度に読んでもらっていた、なじみの本なので選んだ。絵は鮮明で、抽象的に描かれており、ことばも端的に表わされている。



絵本を読みはじめると、Ｕ男は教室の天井ばかりながめて、絵本にあまり関心を示さなかったが、左の絵のように、ふくれて、ふくれて、今にも破裂しそうになると、スーッと顔を絵本の方に向け、視線をおくった。

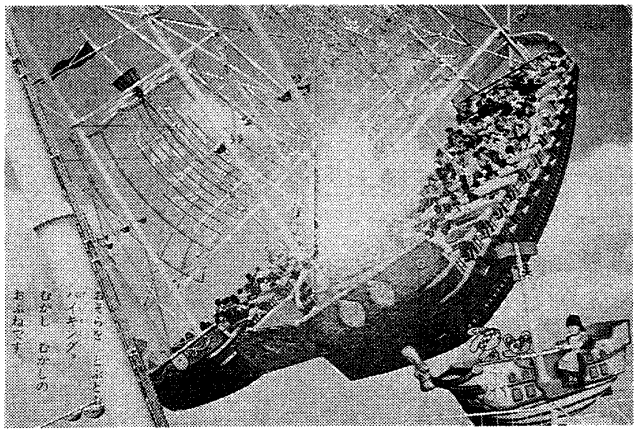
Ｕ男は遊びの中で、物が崩れたりする様子を見て楽しむことがよくあるが、それと結びついたのかもしれない。

昨年まで何度も読みきかせてもらっていて、今にも破裂しそうなスリルを期待していたと思われる。

『たのしい　ゆうえんち』　　（フォト絵本　　小学館）

比較的絵本に興味のあるダウン症のＹ男が、「読んでほしい」と持ってきた。この絵本は

写真のみで構成されているもので、他の子どもたちも興味があるではないかと思い取り上げた。

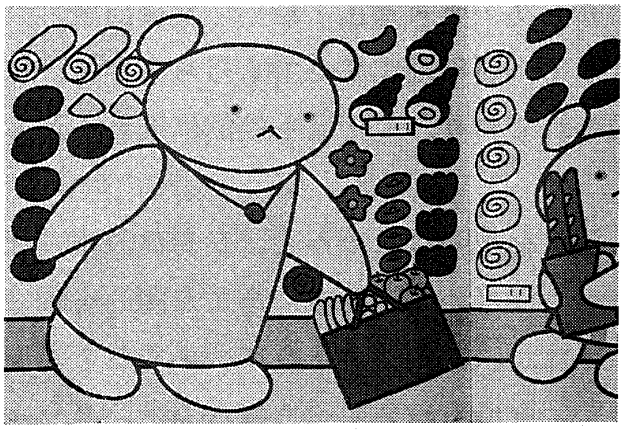


この本は、遊園地の乗り物ばかりを写真にしてあり、その中で、左写真の大型バイキングの場面で、本を左右に大きくゆらしてみると、５名の子どもたちが、本のゆれに合わせて、顔をゆらしたり、目で本を追ったりして見ていた。

写真絵本を左右に大きくゆらすことで、バイキングの臨場感が伝わり、注視できたようである。また、家族といっしょに遊園地へでかけた楽しい経験をしていることも、興味を引いた一つだと思う。この様に自閉傾向の児童を引きつけたことで、写真絵本の良さを改めて感じた。

『しろくまちゃん　ぱんかいに』　　（わかやま　けん・作　　こぐま社）

この絵本の同じページばかりをながめている。自閉傾向のあるM男のために、これを、選んだ。



M男は始めからよく見ていて、好きな場面になると、嬉しそうな顔をしていた。そこで読み手が好きなパンをたずねると、コルネパンを指さした。

また、普段はあまり絵本に興味をもっていないと思っていた、オーム返しの多いT男は同じ質問に対して、「たまご」、と言って、しろくまちゃんの耳を指さした。

これは、いつもなら「どのパンすき」と質問をただくり返すことが多いT男が、まちがいながらも、たまごにそっくりな、しろくまちゃんの耳を指さし「たまご」と答えたのである。このことは、絵本のストーリーを楽しむのではなく、T男なりの絵の楽しみ方だったのではないかと思う。

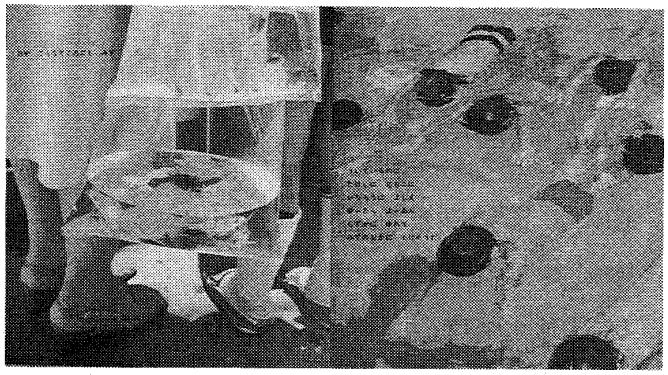
『すすめ　じょせつきかんしゃ』　　（峰村　勝子・作　　福音館書店）

今年初めて雪が降った日だったので、この絵本を選んだ。しかし、除雪機関車は子どもたちになじみがないので、内容に親しみがもてるか心配であった。そのため、読む時には除雪機関車の力強さを強調した。

「じょせつきかんしゃが、雪をかきわけて進みます。ピー・ピー・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ」、と汽笛と共に、力強く進む様子を読んでいくと、いつもは、ほとんど、ことばで反応しない自閉傾向のM男が、読み手の声の調子に、心をゆさぶられたのか、読み手のまねをして「ピー・ピー」、と楽しそうに声を発していた。

『みず』　　（長谷川　摂子・作　英　伸三・写真　　福音館書店）

プールや水あそびの大好きな自閉傾向のＴ男は、昨年からこの本に興味があったようで、時々ながめていた。そこで、今年度もこの絵本取り上げた。



今年度何度か絵本を読んできたが、Ｔ男は時々視線おおくる程度であった。しかし、４回目の時に、水の効果音を入れ読みきかせをしてみた。初めから、子どもたちは生き生きとした目になり、みんなの視線が読み手に集まった。

また、Ｓ子は喜びのあまり、「キャー・キャー」、と楽しい声を出し、Ｔ男は絵本を自分の手に取り見たいと思ったのか、読み手より絵本を取ろうとした程である。

水のきれいな写真と、効果音がマッチし、その臨場感が感動表現の弱い子の心をゆさぶったものと思われる。この事は、読み方の工夫、手だての大切さを改めて感じさせられた。

この様に、４月～12月まで読みきかせをする中で、多くの本に出会わせ子どもたちがどの様なところに気づきを受けとめ、どの様に発展していくかＶＴＲに記録し、特に自閉傾向にある児童を中心に分析してきた。その中で、あまり絵本に対して興味を示さない４人の子どもたちの絵本に対する気づきは、普通に見ていると見逃すことが多い。こうして、ＶＴＲで分析してみると、たしかに細かい子どもたちの気づきに、教師側が気づかされることが多かった。これらのことは、今まで私たち教師が、どれだけ読みきかせをしても、「どうせ、見てくれていない」、と考えていたことに対して、反省を促すものだと思われる。やはり、どんなに重度な子どもであっても、絵本のどこかを感じとっているのではないだろうか。その子どもたちのためにも、読みきかせは続けていかなければならないと再認識するのである。

(3) 中学部

中学部では、１年生から３年生までの子どもたち20名を、学習する上で４つのグループに分けている。

① 子どもの実態

このグループはＡグループで、１年生３名（女子２名）・２年生１名・３年生２名で構成されており、自閉傾向３名、その他３名という障害の状況である。

また、このグループの子どもたちには、単語で話をする子どもが２名、普通に会話できる子どもが４名いる。しかし、友達どうしで会話がはずむということはなく、コミュニケーションがなんとかとれる状態である。

子どもたちの様子をみると、学習の能力差が大変大きく、学校生活は授業中に人の話を最後まで聞くことができず、自分勝手な言動が目立つ、そして、休憩時間中も子どもたちどうしで遊ぶということはみられない。

また、本に関心がある子は１名で、他の子どもたちは、スポーツや一人遊びに興味を示している。したがって、ほとんどの子どもたちは、本に対して興味や関心が乏しい状態である。

② 実践経過

読みきかせは、週に２時間ある国語学習の、初めの10分間を活用して実施した。

新学期の初め、Ａグループの子どもたちは、本に対して興味や関心が乏しいことがわかったので、「絵本に親しむ」ことを育てたいと考え取り組むことにした。また、読みきかせる本も、子どもたちの興味や関心、生活年齢や能力を考えて、絵が鮮明で話の内容が短かい、民話絵本や創作絵本を主として、数多くの絵本を選ぶことにした。

読みきかせを実施した当初は、集中力や持続力が弱いためか、読みきかせの途中で友達どうしで遊びだしたり、一人遊びをする子どもたちがみられた。しかし、回数を重ねるごとに少しずつ絵本に興味を示しだし、各部分部分で感想を発表するようになってきた。特にＨ男は、読みきかせをしていても一人遊びをすることが多かった。ある時「きょうだいきかんしゃ　たろうとじろう」の絵本を読みきかせていた時、二台の機関車がすれちがう絵を見て、「あっ、衝突する。」と突然声を上げた。その声を聞いた他の子どもが「衝突せんわい」と言い返し、話しがはずんだことがあった。Ｈ男は、その時から絵本に対して興味を示しだしてきている。

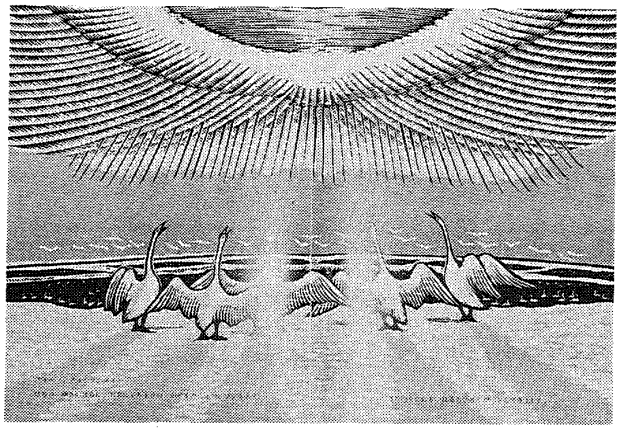
このように、子どもたちは絵やことばの一部に興味を示したことから、絵本への関心が出てきたようである。しかし、絵本全体を通しての内容や感想を話すまでにはいたっていない。また、国語の課題を早く終らせた子に「チャイムが鳴るまで、本を読んでいていいよ。」と言うと、以前は写真集や図鑑の本を見ていた子が、最近はストーリーのある絵本を読むようになったのは、読みきかせの成果であると思われる。

③　実践例

『おおはくちょうのそら』　　（手島圭三郎　文・絵　　福武書店）

＜取り上げた理由＞

この本は、絵が鮮明でストーリーが短かいので、子どもたちが絵本に集中し、最後まで見たり、聞いたりできると考えた。また、内容も身近にいる家族のことが取り上げてあり、優しい家族愛で父や母が子どもたちを育てていることが理解できるだろうと思い選んだ。



＜子どもたちの気づき＞

・T子は「死んだ子どものはくちょうを、おがまんといかんね」と、読みきかせの終わりの方でつぶやいた。

・K男は、「僕が病気の時、お母さんは水枕を取り替えてくれたし、お父さんは、大丈夫かと言ってくれたよ」と、自分の意見を発表することができた。

＜読みきかせを終えて＞

子どもたちの身近な家族のことであるため、内容を理解し、自分に置き替えた感想や、意見が言えたのではないだろうか。読み手は、本の持ち方や位置を考える必要があったように思われる。

『とうさんの手』　　（出口まさあき　絵・文　　岩崎書店）

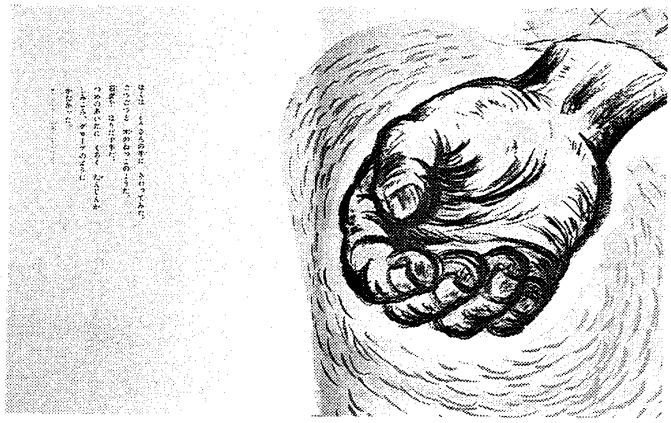
＜取り上げた理由＞

この本は、創作絵本で、絵は水彩画で素朴な描き方がしてある。ストーリーも割合短かく書いてある。また、内容も父を中心とする家族のことであり、中でも父を思う心がうまく表現されており、その心を子どもたちがくみとることができると思って取り上げた。

＜子どもたちの気づき＞

・H男は、絵本の中のだるまストーブの絵を見て「これ、なに？」と言って質問をしてきた。彼は、自分の興味・関心のある絵にのみ目が向けられているようであった。

・A子は、「私のお父さんの手は、私よりも少し大きいし、丸くてすべすべの手や」と、ひとこと感想をもらしていた。



＜読みきかせを終えて＞

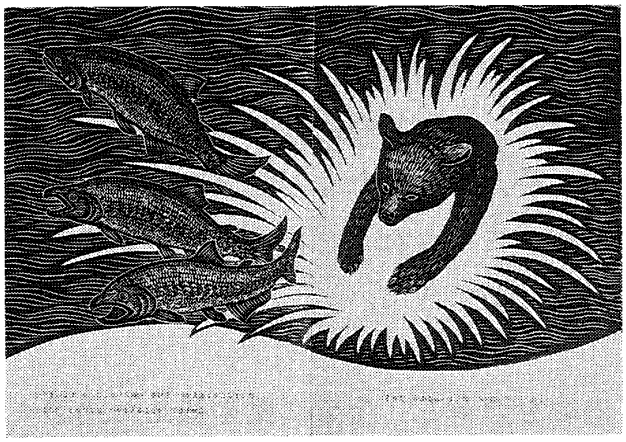
ストーリーが少し長かったため、最後まで絵本を見ることができない子もいて、反応も

いろいろであった。また、読み手は子どもの反応を見ながら、ことばをつけ加えたり、省略したりすると、違った反応や感想が出たように思われる。

『ひぐまのあき』　　（手島圭三郎　文・絵　　福武書店）

＜取り上げた理由＞

季節が晩秋であったことと、子どもたちが動物好きであることが分ったので、両方の内容が書いてあるこの絵本を選んだ。また、絵も鮮明で、ストーリーも短かく、内容も難解ではないので、理解できると思い取り上げることにした。



＜子どもたちの気づき＞

・Y男は、最後のページの絵を見て、「でっけえ、金の魚や」と、びっくり声を出した。

・H男は、各ページにある、かけす・子熊・鮭の絵を指さして、名前をつぶやいていた。

・U男は「子熊は、体が小さいから自分で鮭を取るのはむずかしいんや」とポツリと感想をもらした。

＜読みきかせを終えて＞

ストーリーとしては難解ではないのだが、絵本の根底にある「自分のことは自分で工夫してやりぬく」という考え方はくみとることができなかった。また、読み手は、短かい文章であるので、熟読してから読みきかせると異なった感じ方ができたのではないかと思われる。

④　実践の考察

最初、このグループで読みきかせを始めた時は、絵本に興味や関心がなく、読みきかせても、集中して見ることができなかったので、「どうなるかなあ？」と思った。しかし、読みきかせの回数を重ねるにしたがって、ふとしたきっかけや、グループ内の友達の力（集団の力）などで、少しずつ絵本に興味や関心を示し絵や内容の一部分の感想や意見が言えるようになった。これは、このグループの本年度の目標である「絵本に親しむ」ことがある程度達成されたのではないかと思う。しかし、まだ絵本に対して受け身であって絵本のおもしろさを身につけていない。子どもたちが、自分の好きな本を自分で選び、自分で読んでいくようになると、絵本の楽しさがわかり、生活も広がりをもつようになると思う。そのために教師は、子どもの生活体験や興味、関心のある絵本を選び出し、読み方の工夫をして、読みきかせを行っていかなければならない。そうすることで、子どもたちが、知らず知らずのうちに、絵本の楽しさを身につけていくもとになると思われる。

(4)　高等部

高等部ではグループ学習として、国語・数学・社会・理科が位置づけられており、国語学習の一分野として“読みきかせの授業”を行っている。３学年全員を学習指導上５つのグループに分けている。グループ名をここでは、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅとし、その人数はＡ…９名　Ｂ…６名　Ｃ…６名　Ｄ…４名　Ｅ…４名である。

読みきかせの授業は今年で11年になる。各グループの生徒の実態に応じて、本の選び方や読みきかせ方を考慮し、ひとりでも多くの生徒が感動（おもしろい　かわいい　優しいかわいそう等、また、登場人物などへの思いを含めて）をもつように研究し、実践をしてきた。なお、読みきかせた絵本を更に意識づけ、その感動をクラスの友達と交流できるように各教室に“読書コーナー”（各グループで読みきかせた絵本の表紙を縮小コピーし、貼付していく）をつくったり、感想文集を読み合ったり、その絵本のもつ良さや楽しさをもつような手だても３年前から続けている。

ところで、今年度は読みきかせを通して、その絵本の意図をいかに気づかせるか、また、生徒の気づき（視線・表情・つぶやき・感想等）を受けとめながら、絵本の選択や読みきかせの手だてについても研究し実践してきた。

そこで、生徒の気づきに視点をあて、その実践の１例を取り上げる。

〔実践例　１〕　絵本の読みきかせを軽視していたＨ男

今年度、１年生に入学したＨ男はＡグループである。社会的用語や国語的な語いも漢字も豊かであり、学習面ではやや自負していたように見えた。そのため、読みきかせの授業においては幼児っぽいと見下げていたのだろうか、心をこめて読みきかせても感動がもてず、その絵本の意図を素直にくみとることができなかった。

そこで、Ｈ男にはその本の意図や良さを気づかせるために、特に、問いかけを考慮した。

『三ねん　ねたろう』（大川悦生・作　渡辺三郎・絵　ポプラ社）について

高等部で田植えがあり、Ａグループでは、その前に用水について考えさせたくてこの絵本を取り上げた。Ｈ男には次の点に気づかせるように考慮した。

①　働き者であったこの男が、なぜ、働かなくなったのか

②　三年あまりも寝ていて、何を考えていたのだろうか

③　農業用水の大切や、他の用水について考えてみよう

④　高等部の田植えの時、田んぼの水はどこから入ってきたのだろうか、見てこよう

『ふしぎな　たけのこ』（松野正子・作　瀬川康男・絵　福音館書店）について

高等部でたけのこ掘りがあり、その後日に読みきかせた絵本である。生徒にはこの絵本の奇想天外なおもしろさや、山の者と海の者とが行き来できるようになった民話的なむかしの人の心を感じとらせていきたいと思っていた。そこで、Ｈ男には、特に、日本の国土の地形や各地での生活の知恵などを聞いたり、交通のはじまりとその後、現在に至るまで

のことを考えてみる楽しさをもつようにした。

H男は、考えていく楽しさや、知るよろこびを通して、絵本の楽しさを感じ、心情が豊かになっていくのだと思う。嬉しいことにH男は1学期の終り頃から、読みきかせの授業を楽しむようになり、感動のうなづきや、その絵本の意図をもった感想を素直に書くようになった。また、この授業後の休憩時に、「おもしろかったです」という言葉も耳にするようになった。

〔実践例　2〕　話しことばの無いEグループ4人の気づきの高まり

Eグループ4人（A子・K男・Y男・M男）は、話しことばが殆んど無く知能面でも低く2人の教師が指導にあったている。4人とも高等部2年生であるが、昨年は読みきかせの授業には参加しなかった。そこで、もう一人のS先生と、読みきかせの大切さや40分間のグループ学習の計画を話し合い、次のように実践することにした。

・4人の集団では、読みきかせで絵本の世界へ入りきれず、読み手と聞き手の感動を共有することができないので、読みきかせの基本である一対一（教師と生徒）で行い、その生徒の反応や気づきを見ていく。

・1人の生徒への読みきかせの時間は、集中度合も考慮し、10分～15分くらいとする。

そこで、とりあえず1学期には、S教師は昨年度言語指導を担当していたY男とM男を、K教師はA子とK男を担当していく。そして、2学期には交代し、次は、生徒の実態を見て考慮していく。

読みきかせの場をEグループが学習に使っている生活実習室とする。この実習室の1隅にカラーマットを敷き、10冊あまりの絵本を並べる。そして、読みきかせを待っている他の2人の生徒が、このマットの上で、自由に絵本を手に取り楽しんでくれたらと思う。

教師が選んだ絵本で一対一の読みきかせが終ったら、記録用紙に氏名と絵本の題名をなぞり書きをさせ、各自のファイルに綴じ、読書記録としておく。

・読みきかせをする絵本は、2人の教師がそれぞれの生徒の反応や気づきを話し合い選んでいく。

・読み手（教師）は、まず、絵本を読んでやりたいという思いをもち、生徒の感動をゆさぶるように楽しく読みきかせをする。

上記のように読みきかせを重ねる毎に、絵本に少しずつ視線が向けられるようになった。1冊読み終るまで座っておれなかったY男もM男も、1学期の終り頃には、読み手の横にじっーと座り、ときどき、絵を見たり、ことばを聞いているような体の表情が見られるようになった。

A子とK男は、4月はじめから読み手（教師）に親しさをもつように座り、絵本のページも自分でめくることがよくあった、そこで、A子とK男について気づきをより高めるた

めに考慮したことの１例は、後のページで記することとする。

《１学期に読みきかせをした絵本》（作・絵・出版社は絵本リストに記載）

Ｙ男	『しろくまちゃんのほっとけーき』　『のせて　のせて』　『ひこうきパン』
Ｍ男	『はらぺこ　あおむし』　『あそびにきてください』
Ａ子	『のせて　のせて』　『もしもし　おかあさん』　『はらぺこ　あおむし』
Ｋ男	『あそびにきてください』　『もこ　もこもこ』　『おおきな　かぶ』

２学期には、担当の生徒を交代して読みきかせをしようと４月当初に話し合っていたが、１学期の終り頃には、Ｙ男もＭ男も読みきかせを楽しむような表情もみられ、読み手と聞き手との安定したつながりを見られるようになったので、２学期も同じ生徒を担当することにした。

そして、２学期からは、読みきかせの場を和室にした。和室は生徒の心をやわらげ、絵本のおもしろさや楽しさを少しでも感じとることができると思ったからである。

なお、１学期の４人の生徒の実態をみて、絵本への気づきをより高めるために、Ａ子とＫ男は９月から、Ｙ男とＭ男は12月から、各自に好きな絵本を選ばせることにした。１学期に読みきかせた絵本も含め、10冊あまりの絵本を並べ、題名を読んで聞かせ、生徒自身が手にとった絵本を教師が読みきかせることにした。生徒の体調の良くない時には、絵本を手にしないこともあるが、その時は教師から声かけをして、今までに楽しんでいた絵本を手に取らすこともあった。

＜Ａ子について＞　９月初めは『はらぺこ　あおむし』　『ましろのあさ』を手に取ったが、その後の４回は『もしもし　おかあさん』であった。Ａ子にとっては、何かひきつけられる絵本なのである。題名やことばが好きなのか、絵がかわいいからだろうか。

まず、最初は教師の顔をみつめ、読んでねというように軽く手をたたく。そして、いっしょに読もうと題名の文字を指さしていく。教師は嬉しい思いで、ゆっくりと心をこめて題名を読む。次に表紙の絵を見ながらＡ子と話し合う。

「ほーら、かわいい猫の子どもだね」……Ａ子はしっかりとうなづく。

「ほら、トラちゃんね、クロちゃんね、ミケちゃんね」と教師は絵に指をさす。Ａ子も猫の絵を１匹ずつ指をさし、「アー、アー、アー」としっかり声を出す。次からのページもＡ子は文字に指をさし、教師は読むというように、Ａ子と絵を見合い読みきかせをする。

しかし、気づきをより高めるために、絵を見て問いかけをし、指さしやうなづきを多くしていく。母猫が子猫を探している場面では、Ａ子は悲しい表情で教師の顔を見るのである。読みきかせでのことばや絵から心情を受けとめられるＡ子である。

＜Ｋ男について＞　中学部の時にも教師は絵本を出会わせていたり、小さい時から母親がよく絵本を読んで聞かせていたということである。そのためだろうか、Ｋ男は読みきかせの時になると、にこっとして安心したように読み手の教師の前や横に座るのである。

Ｋ男の手にとった絵本は『はらぺこ　あおむし』　『ましろのあさ』　『スイミー』『もしもし　おかあさん』　『しろくまちゃんのほっとけーき』であった。

『しろくまちゃんのほっとけーき』は、２週も続けて手に取り、フライパンで焼けることばのページでは、教師の顔をのぞきこむようにして、いっしょに「ぶつ　ぶつ」と声を出して読むのである。そして、笑顔で体をゆらしたり、手をたたいたりして楽しい表情をした。そして、気づきをより高めるために、この絵本をこの時にくり返し読みきかせ、絵を見ての問いかけもした。

『はらぺこ　あおむし』の読みきかせをＶＴＲで分析した時も、Ｋ男の絵への視線や表情が場面を追って変わってきていることに教師が気づき、Ｋ男への読みきかせでの手だてを考慮するようにした。

◆“読みきかせの授業”を通して　今　思うこと◆

Ａ・Ｂグループの生徒の５～６人やＣ・Ｄグループの３～４人は、読みきかせの授業を心待ちにしている。「先生、きょう、どんな本読んでくれるの」と声をかけられ、教師は嬉しくなり、励まされる思いになる。また、Ｅグループの生徒も読みきかせをしている時の感動表現（気づき）を見ると、この時間を快く思っているようだ。

ただ、自閉傾向の強い生徒への読みきかせにおいて、気づきを高めるために、絵本の出会わせ方やことばかけ等を考慮してきたが、まだ、生徒の反応は充分とは言えず、今後の研究課題である。

しかし、障害の程度によって心情や感動表現の差異はあるが、生徒たちの感想やつぶやきや表情で、あらためて読みきかせの大切さを思うのである。

「高等部のＡグループで知的に高いと思われる生徒にも、なぜ、絵本なのか」と、ある教師から問われたことがある。絵本は幼児へのものであり、知的に低い子どもに……という思いをもっている人もいるが、決してそうではない。良い絵本は精選された豊かなことばと美の感性を育てるような良い絵が描かれている。勿論、楽しい絵、かわいい絵も読み手の心をゆさぶってくれる良さがある。

ある児童文学作家のことばを思い出す――良い絵本は文学作品である。文学作品は、今の自分をみつめ、経験からつくりあげた人生観を、つまり“哲学”をもっているのである。――と。

本校の生徒も読みきかせにおいて、登場人物の人柄を考えたり、優しさ、おもしろさ、不思議さをつぶやいたりするのも良い絵本のもつ文学性だと思う。生徒たちに文学性の高い絵本を読みきかせるために、教師は多くの絵本を読むことであり、生徒と感動を共にできる豊かな感性もつことであると強く思う今である。

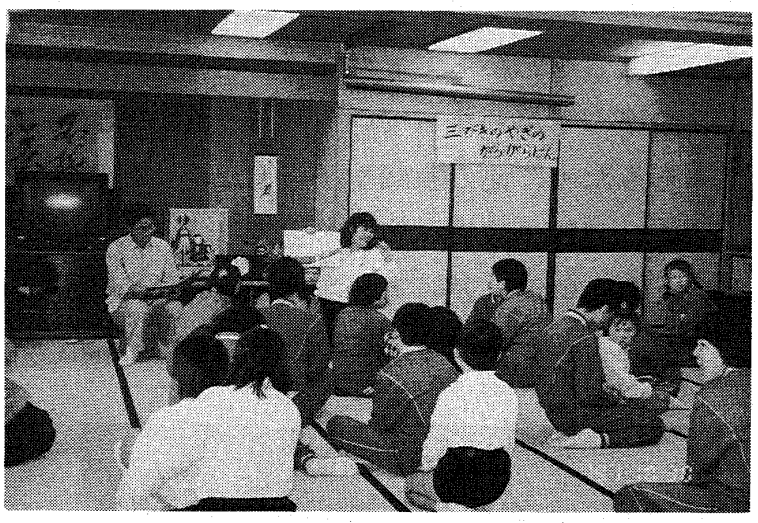
(5) 校内「絵本の日」

本校の和室で、毎週水曜日の昼休みに、グループのメンバーが順番に絵本を読みきかせる「絵本の日」がスタートして3年目をむかえた。この「絵本の日」は、全校の子どもたちに多くの絵本を出会わせ、絵本の楽しさを知ってもらおうと思って発足したのである。これは、昼休みの自由な時間に、自由に参加して絵本を楽しむ集まりである。

過去2年間「絵本の日」を続ける中で、絵本の楽しさを知ってもらうため、たくさん読みきかせてきた。しかし、今年度は子どもたちが自分で好きな絵本を選び出し、自分のペースで、ゆったりと絵本を楽しんでほしいと考えた。そこで、和室に入ってきた子どもたちが、手あそびの始まるまでの間、自由読書の時間を設け、取り組んでみた。また、一人でも多くの子どもたちが参加できるように、他の学級担任からも呼びかけてもらったり、「あなたも　子どもたちの前で　絵本を読んでみませんか？」と書いたチラシで読み手を募集し、何人かの教師に読みきかせを行ってもらった。

絵本の日の一日

登校時	看板掛け	玄関ホール前 小学部部室前
12:40	校内放送	
12:45	読みかせ	・自由読書 ・手あそび ・読みきかせ
13:05	読書カード配布	



朝、子どもたちが登校してくると、玄関のホールで「絵本の日」という看板を見つけて、「今日は絵本の日や」とつぶやいたり、看板をジーッと注視して、なでていく子どもたちがいる。また、昼の休み時間「今日は、絵本の日です」という放送の声を聞いて、各教室や食堂から和室に集まってくる子どもたちは全校生徒の三分の一程にもなり、「絵本の日」を楽しみにしている。

子どもたちが和室に入ると、自分の好きな場所で、好きな絵本を選び、読みだす。一冊の絵本を何回も何回も読みふける子ども、絵本の中の絵だけを見てページをパラパラとめくりつぶやいている子ども、一冊の絵本を見終わると次の絵本をさがす子ども、先生の膝の上で絵本を読んでもらっている子ども、和室の中には様々な光景が見られる。しばらくすると、「グーチョキパー」の手あそびがはじまる。子どもたちは、自分の見ていた絵本を机に返し、手あそびに参加することも定着してきた。

ほどなく、その日の読みきかせが始まりだすと、絵本に視線を向け、読みきかせに耳を

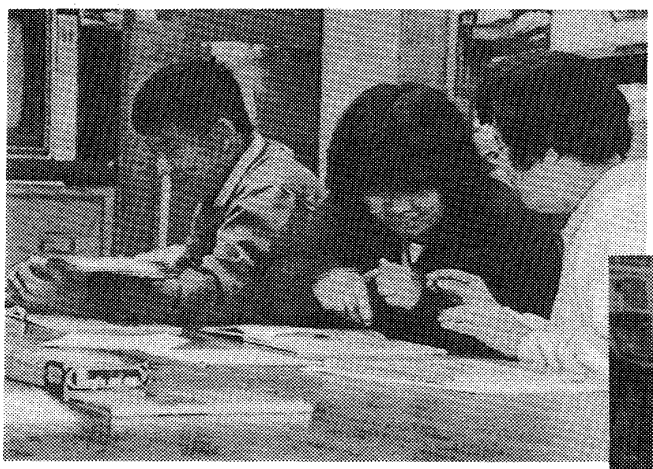
傾けだす。子どもたちの中には、おもしろい所では声を出したり、くり返しのことばを、つぶやいたり、読んでいる絵本の一点を指で触りにきたりする子がいる。また、読みきかせの雰囲気を楽しんでいる子や、他の子どもたちの言動につられて、彼らなりの表現を見せる子もいる。

しかし、中には寝そべって、ボンヤリしている子どもや、絵本に飽きて他の子どもに、ちょっかいを出す子もいる。いずれにしてもこの集まりは、何の束縛もなくゆったりとした雰囲気の中で行われるので、子どもたちは「絵本の日」を楽しみにしているようである。

さらに、グループのメンバーとしては、「絵本の日」の読みきかせの充実をはかるために、読みきかせが終った後で、読み手が記録帳に「読んだ後の反省や子どもたちの反応」を記録している。そして、それをもとにして、グループ研究会で、絵本の選択や読みきかせの工夫の話し合いを行い研究を重ねている。

「絵本の日」に集まってくる子どもたちを見てみると、読書カードが欲しくてくる子どもも何人かはいるが、３年間「絵本の日」の読みきかせを継続してきた結果、少しずつ絵本の楽しさをわかってきたようである。しかし、「絵本の日」に集まってくる子どもたちは絵本の楽しさがわかっているだろうが、まだ参加しない子どもたちに、その楽しさを知ってもらうため、他の教師や子どもたちに呼びかける必要がある。

また、年齢や障害、能力の違う子どもたちに対して、どんな絵本を選ぶか、どのように読んだらよいか、読み方の工夫もまだまだ課題が多い。今後一人でも多くの子どもに絵本の楽しさをわかってもらうために「絵本の日」を継続して行っていきたい。



グループ学習のひととき

下校前のひととき

『絵本の日』――その日の記録ノートより―

	日付	書　名	とりあげた理由と読みきかせでの配慮	子どもの反応と反省
2回目	5/20	もしもし おでんわ	・子どたちの身近にある電話をとりあげてあり、岩崎ちひろ独特のやわらかな絵が美しい。 ・“ジリリーン”という音を楽しみながら読み進めていくようにした。	・絵本をよく見ていたＹ男は「おじいちゃんの家に電話をしたことがあるよ」と話してくれた。また、高等部のＳ男はベルの音を何度もまねして言っていた。 ・内容がわかりやすく、子どもたちは楽しく参加できた。
6回目	6/24	ねずみのすもう	・主人公がねずみなので、小学部の子どもが話に入りやすく、相撲を題材にしてあるので動きがあり、興味をひくと思った。 ・２匹のねずみの違いやおじいさんとおばあさんの声のちがいなどに配慮した。	・子どもたちに内容をわかりやすくしたいと思い、絵本の中のことばを短くしたが、あまり感動がもてず無理であった。 ・おじいさんとおばあさんの優しさが、高等部の生徒に伝わらなかったようだ。
9回目	9/30	うんどう会がはじまった	・高等部の生徒が参加できないと聞いて、小学部の生徒を対象にして絵本を読むことにした。 ・運動会は、約束事さえ守れば、非常に楽しいものであるということを、子どもたちにわからせたい。	・小学部の子どもたちは、運動会の種目だけに興味を示し自分勝手な行動が楽しい雰囲気をこわすということは、わかりにくかったようだ。 ・絵本を読む時の絵本の位置（高さ）を、もう少し考えるべきであった。
11回目	11/4	14ひきのおつきみ	・お月見という清らかな明るい絵本であり、色の美しさと短い豊かなことばは子どもたちの心をゆさぶることができる。 ・家族の楽しい思いを意識づけるために、14ひきの名前を書いて貼付し、導入とした。	・導入の手だては良かった。 ・気づきの弱い子どもや生徒たちの心をゆさぶるために、お月さんの歌をうたい楽しい雰囲気になった。 ・４場面の短いことばを斉読したことは、この絵本への感動を高めたようだ。

4　まとめ

絵本の読みきかせを通して、子どもの心をゆさぶり豊かな感性を育てたいと願って発足したこのグループ研究も４年目になる。

最初、我々教師の間には「着席すらできない子どもたちに読みきかせはできるのか」と言った声もあり、読みきかせに対する必要性があまり意識されていなかったようである。

絵本の楽しさがもちにくい子どもたちの心をどのようにゆさぶったらよいか、ということは常に話し合われ、その手だて（ペプサート、音響、劇化など）についても研究を重ねてきた。

ここ二年間は子どもの気づきに視点をあてて研究を続けてきたが、読みきかせている場面のＶＴＲを見ると、まったく絵本を見ていないと思われた子が時々絵本に視線を向けていたり、読みきかせている間、穏やかな表情になってきている姿に気づかされる。そのことからどの子も読みきかせを通して何かを感じとっているのだということを、あらためて知らされた。

また、ずっと読みきかせを続けてきたことで、その感動が蓄積され「三年間たってようやくつぶやきが出てきた。」といった実践も聞かれ、続けることの大切さを感じている。

読みきかせることは、読み手（教師）の絵本に対する感動、そしてその人柄も含めて子どもに伝わっていく。また、聞き手（子ども）からの素直な感動や感想からは教えられることも多く、我々の感性を高めていくことの大切さを感じる。

我々はこの四年間の実践、研究を通してすべての子どもたちに絵本を読みきかせる場が保障されてほしいと心から願うものである。

読みきかせをした絵本や読みきかせをしたい絵本の１例

「絵本の日」

書　　名	作	絵	出　版　社
かたあしのひよこ	水谷章三	いとうひろし	ほるぷ出版
もしもしおでんわ	松谷みよこ	岩崎ちひろ	童心社
にんじんロケット	佐々木マキ	佐々木マキ	子どものとも
あそびにきてください	なかえよしを	上野紀子	ポプラ社
ちちんぷいのぷい	北田卓史	北田卓史	金の星社
ねずみのすもう	大川悦生	梅田俊作	ポプラ社
おたまじゃくしの101ちゃん	かこさとし	かこさとし	偕成社
こいぬがうまれるよ	ジョアンナ・コール	つぼいいくみ	福音館
うんどう会がはじまった	寺村輝夫	いもとようこ	あかね書房
ねずみのすもう	樋口淳	二俣英五郎	ほるぷ出版

ちいさなたまねぎさん	せなけいこ	せなけいこ	金の星社
のぼっちゃう	八木田宣子	太田大八	文化出版
ねぼすけスーザのおかいもの	広野多珂子	広野多珂子	福音館書店
14ひきのおつきみ	いわむらかずお	いわむらかずお	童心社
半日村	斉藤隆介	滝平二郎	岩崎書店
たんたん　たまご	高木あき子	本信公久	すずき出版
うさこのサンタクロース	矢崎節夫	黒井健	フレーベル館

小学部　低学年

こぐまちゃんのえほんシリーズ しろくまちゃん　ぱんかいに他	若山憲	若山憲	こぐま社
ノンタンのえほんシリーズ およぐの　だいすき他	おおともやすお	おおともさちこ	偕成社
いないいないばあ　あそび他	木村裕一	木村裕一	偕成社
るるるるる	五味太郎	五味太郎	偕成社
ぽぽぽぽぽほ	五味太郎	五味太郎	偕成社
はらぺこ　あおむし	エリック・カール もりひさし（訳）		偕成社
みんな　うんち	五味太郎	五味太郎	偕成社
りんごが　ストーン	多田ヒロシ	多田ヒロシ	文研出版
たんたん　たまご	高木あきこ	本信公久	すずき出版
ちいさな　たまねぎさん	せなけいこ	せなけいこ	金の星社
はじめまして！カジパンちゃん	きたやまようこ	きたやまようこ	偕成社
はけたよ　はけたよ	かんざわとしこ	にしまきかやこ	偕成社
ぐりとぐら	かんざわえりこ	かんざわえりこ	福音館書店
てぶくろ	エウゲーニ・M・ラチョフ 内田莉莎子（訳）		福音館書店

小学部　高学部年

おつきさんのめだまやき	高橋宏幸	高橋宏幸	岩崎書店
か・か・か・か・か	五味太郎	五味太郎	偕成社
ちょろりんのすてきなセーター	降矢なな	降矢なな	福音館書店
11ぴきのねこ　ふくろのなか	馬場のぼる	馬場のぼる	こぐま社
おひるね　こねこ	金尾恵子	金尾恵子	福音館書店
りんごがたべたい　ねずみくん	なかえよしを	上野紀子	ポプラ社
おじさんの　かさ	さのようこ	さのようこ	銀河社
のろまなローラー	小出正吾	山本忠敬	福音館書店
ねずみのすもう	大川悦生	梅田俊作	ポプラ社

うさこのサンタクロース	矢崎節夫	黒井健	フレーベル館
おばけの　バーバパパ	アネット・チゾン やましたはるお(訳)	タラス・ティラー	偕成社
ねぼすけスーザのおかいもの	広野多珂子	広野多珂子	福音館書店
三びきのやぎのがらがらどん	マーシャブラウン せたていじ（訳）		福音館書店
いたずらきかんしゃちゅうちゅう	バージニア・リー・バートン むらおかはなこ（訳）		福音館書店
じどうしゃ	寺島龍一	寺島龍一	福音館書店

「中学部」

おんぶ　おばけ	松谷みよ子	ひらやまえいぞう	童心社
すてきな　三にんぐみ	トミー・アンゲラー	いまえよしとも	偕成社
けむり仙人	椋鳩十	太田大八	ポプラ社
たなばた	君島久子	初山滋	福音館書店
きょうだいきかんしゃ　たろうとじろう	鶴見正夫	高橋透	ポプラ社
おおはくちょうのそら	手島圭三郎	手島圭三郎	福武書店
きつねと　つきみそう	こわせたまみ	いもとようこ	金の星社
ちからたろう	今江祥智	田島征三	ポプラ社
とうさんの手	出口まさあき	出口まさあき	岩崎書店
はらたちごんべ	田崎克彦	金沢佑光	ポプラ社
鯉にょうぼう	松谷みよ子	西山三郎	岩崎書店
モチモチの木	斉藤隆介	滝平二郎	岩崎書店
半日村	斉藤隆介	滝平二郎	岩崎書店
びんぼうがみとふくのかみ	大川悦生	長谷川知子	ポプラ社
ひぐまのあき	手島圭三郎	手島圭三郎	福武書店
いちにちにへんとおるバス	中川正文	梶山俊夫	ひかりのくに

高等部　A・Bグループ

ましろのあさ	いもとようこ	いもとようこ	金の星社
ふしぎな　たけのこ	松野正子	瀬川康男	福音館書店
三ねんねたろう	大川悦生	渡辺三郎	ポプラ社
鼻かけじぞうさん	かつおきんや	箕田源二郎	講談社
ベトちゃんドクちゃんからの手紙	松谷みよ子	井口文秀	童心社
やまなしもぎ	平野直（再話）	太田大八	福音館書店
ごんぎつね	新美南吉	黒井健	偕成社
火	斉藤隆介	箕田源二郎	岩崎書店
鯉にょうぼう	松谷みよ子	西山三郎	岩崎書店
スーホーの白い馬	大塚勇三(再話)	赤羽末吉	福音館書店

花さき山	斉藤隆介	滝平二郎	岩崎書店
半日村	斉藤隆介	滝平二郎	岩崎書店
すてきな三人ぐみ	ドミーアンゲラー 今井祥智（訳）		偕成社
けむり仙人	椋鳩	太田大八	ポプラ社
とっかりこっこのこもりうた	わたり むつこ	鹿目佳代子	リブリオ出版

高等部　C・Dグループ

あそびにきてください	なかえ よしを	上野紀子	ポプラ社
はらぺこあおむし	エリック・カール もりひさし（訳）		偕成社
しろくまちゃんのほっとけーき	わかやま けん	わかやま けん	こぐま社
んくいしんぼうのはなこさん	いしい ももこ	なかたにちよこ	福音館書店
はるかぜのたいこ	安房直子	葉祥明	金の星社
三ねんねたろう	大川悦生	渡辺三郎	ポプラ社
ぼくのうち　どこ	なかえ よしを	上野紀子	ポプラ社
三びきのやぎのからからどん	マーシャ ブラウン 瀬田慎二（訳）		福音館書店
もしもし　おかあさん	久保喬	いもと ようこ	金の星社
おじさんのかさ	さのようこ	さのようこ	銀河社
ひこうきパン	たかはまなおこ	ふるかわひでお	ＰＨＰ研究所
ねずみのすもう	樋口淳	二俣英五郎	ほるぷ出版
花さき山	斉藤隆介	滝平二郎	岩崎書店

高等部　Eグループ

のせて　のせて	松谷みよ子	東光寺啓	童心社
もしもし　おかあさん	久保喬	いもと ようこ	金の星社
はらぺこ　あおむし	エリック・カール もりひさし（訳）		偕成社
おおきな　かぶ	内田莉沙子(再話)	佐藤忠良	福音館書店
しろくまちゃんのほっとけーき	わかやま けん	わかやま けん	こぐま社
三びきのやぎのからからどん	瀬田貞二（訳）	マーシャ・ブラウン	福音館書店
ひこうきパン	たかはまなおこ	ふるかわひでお	ＰＨＰ研究所
あそびにきてください	なかえ よしを	上野紀子	ポプラ社
はるかぜのたいこ	安房直子	葉祥明	金の星社
ぼくのうち　どこ	なかえ よしを	上野紀子	ポプラ社
ぐりとぐら	中川季枝子	大村百合子	福音館書店

（内田　明徳　　今井　康弘　　勝尾　外美子　　竹森　明美　　熊野　嘉子）